

## 我が甲蟲學界の恩人 GEORGE LEWIS 逝く (1)

農學士 湯 淺 啓 温

1926 年 9 月 5 日、Folkestone の邸で、彼の 87 年の長い生涯の幕は靜に閉された。

彼より前にも、SIEBOLD, GASCHKEVITCH 夫妻、MORAWITZ 等、彼と同じ頃にも、LENZ, HILLER, HILGENDORF, DONITZ, HOFFMANN, VOLXEM, REIN 等の人達の貢献があるにはあつたが、然し、彼程大規模に我が甲蟲類を採集して、學界に紹介した人はなかつた。否、彼の後にも、SAUTER, GALLOIS を除いたら、一人の匹敵するものもあるまい。我國から故國へ歸つて後の、彼の長い年月の大部分は甲蟲類の分類學的研究に捧けられ、多年エンマムシ科 Histeridae の世界的權威として認められて居た。

GEORGE LEWIS は 1839 年 8 月 5 日、英國 Blackhead の St. John 教區の牧師 R. G. LEWIS 師の第二子として、この世に生れ來た。彼の學校生活等については記したものを見ないが、兎も角、彼も亦年少より熱心な甲蟲採集家であつたといふ。所が、1862 年、茶の取引をしてゐた商會の代表者として支那に赴くや、22 歳のうら若い彼の心をとらへたものは、異國情緒の最も濃い支那の甲蟲であつた。彼の支那に於ける採集品は輸送困難の爲め大部分失はれた様であるが、若干の新種——特にゴミムシ科 Carabidae は BATES に依つて——が記載された。

1867 年頃——何の爲めだか判らないが、おそらく、矢張り茶の商賣の事であつたらう——彼はこの日本へ渡つて來た (2)。その當時の我が昆蟲相に関する知識の極めて少かつた事は云ふ迄もない。そして、彼の 5 年間の饒みな

(1) 筆者は、特に彼の日本滞在中の事柄及び彼の採集品に基づく彼自身並に諸學者の論文等に就て詳しく書いて見度いと思つて居たが、今忙しくて到底意を果す事が出来ない。茲には主として Ent. monthl. mag. LXII (3, XI), 1926, p. 270 に依つて記事をもつておく。上の意志は、いつか、果す限りであるから、彼に關する事柄を御承知の方は、どんな斷片でも、筆者迄お知らせ願ひ度い。

(2) 斯く傳へられてはゐるが、之より前 1864 年 7 月と 1865 年 5 月とに長崎で認めた短い Note を Ent. month. mag. (I, p. 1865, p. 262; II, 1865, p. 89) に寄せてゐる所を見れば、1864-65 年頃我國に來てゐた事は確かである。只、この時以來ずっと日本に滞在したのか、支那との間を何度も往復したのかは全く判つてゐない。

い努力は、我が甲蟲類の驚くべき聚積として結果し、それらの大多數は學術上全く新しいものであつた。彼自身及び彼から材料の供給を受けた英國及び大陸の多數の専門家達——BALY, BATES, GORHAM, KIESENWETTER, MARSEUL, REITER, ROELOFS, RYE, SAUNDERS, SHARP, WATERHOUSE, WOLLASTON 等——に依る、此偉大な採集品の分類は 1872 年彼が故國へ歸つて後數年を費し、多くは 1873-76 年の間に發表された。如上の結果は、1879 年、彼の編んだ日本産甲蟲類目錄 A Catalogue of Coleoptera from the Japanese Archipelago (8vo, 31頁)に依て窺ふ事が出来る。即ち此目錄は少くも 862 屬、2227 種を含んでゐるのである。

1880 年、彼は更に妻 JULIA を伴つて再び我國を訪れ、最初の時に踏査し得なかつた部分を調査して、彼の我が甲蟲相に關する業績を完成しようとした。即ち、以前の採集品は長崎を中心とした地方が主なものであつたが、今度は二ヶ年の大部分——1880 年 2 月 27 日から 1881 年 11 月 3 日まで——をかけて、北は札幌から南は霧島まで、特に中仙道及び關東、東北地方に力を注いで、熱心な採集の旅を續けた。又、此間に、彼によつて訓練された我國の有能な採集人を方々（之の内に佐渡、伊豆大島も含まれて居る）に送つてゐるし、尚、對馬、種子ヶ島、天草、釜山等の甲蟲をも少數乍ら手に入れて、すばらしい採集品を故國へ送る事が出来た（3）。歸途 Ceylon に 6 ヶ月を過し、そこでも亦致々として採集を續け、彼自身の計算によると約 1200 種の甲蟲を發見したのであつた。1882 年彼は故國に歸り着き、故國及び大陸諸國の多數の専門家達の助力を得て、採集品の研究及び記載に身を委ねた。是等の採集品は、1910 年、他國に搬出しな事を條件に British Museum に買取られたが、之の中には既知日本産甲蟲類の模式標本が、恐らく他の何れの採集品と雖も匹敵し得ない程多數含まれてゐる。

日本産エンマムシ科の研究中、彼は全世界の他の地方のものに就ても充分知識を有してゐる事が必要だと知つて、此目的の爲に此科の甲蟲を廣く集めようと努力した。そして他の國々の種も日本のと同様によく知られてゐない事が判つたので、此科の研究を擴張して遂に彼の時間の大部分を此比較的小形な蟲の群に委ねるに至た。彼の日本産エンマムシ科に關する最初の論文は 1884 年に公にされ、引續き 30 年間同じ科に關する他の論文を後から後からと規則正しく出して行つた。かくて 7 年前彼の最後の論文を書いた時迄に 60 屬、750 種以上のエンマムシを記載した。永年其の研究に身を委ねた結果集積された此科の甲蟲の見事な標本も同じく British Museum に傳へられたのであつた。

傳へられる所によれば、彼は非常に健康な人で、且又極めて高潔、温厚、人を惹付ける様な性格の持主であつたが、非常に内氣な方で、科學上の業績の重要さに拘らずほんの少數の人にしか知られてゐなかつたと云ふ事である。

(1927 年 7 月)

(3) 第二回の旅行の詳しい日程等は、H. W. BATES が 1883 年の Trans. Ent. Soc. Lond. に地圖を添へて記してゐる。此度の旅行では甲蟲以外のものも大分採つたので、SMITH や DISTANT 等の論文が出てゐる。